

都市化とパーソナル・ネットワーク

青山 瑠衣

近年、人々のつながりのかたちやコミュニティの在り方は大きく変容しつつある。十年前、著者は田舎と都会での人々のつながりの違いに着目し、都市化がパーソナル・ネットワークにもたらす影響について調査研究を行った。今回はその内容を振り返り、現代における人々のつながりの在り方を考えてみたい。

パーソナル・ネットワーク論

パーソナル・ネットワークとは端的に言えば、個人を取り巻く、親族、近隣者、職場仲間、友人といった親しい人びとのつながりのことである。都市度の異なる地域でのパーソナル・ネットワークの比較研究は、先行研究が少ないものの、居住地の都市度が高まるにつれ親族・近隣といった非選択的ネットワークが衰退し、仕事仲間、友人などの選択的ネットワークが増加するといったことや、生活利便性が高くない農村部ほど、頻繁に來られる距離に別居子が住んでおり、その存在が情緒的にも手段的にも大きな支えとなっていることが提示されている。

二地域間の比較調査

本調査は、都市度がパーソナル・ネットワークに与える影響を調査するため、農山村地域の愛知県豊田市足助町（以下足助町）と都市地域の大阪府豊中市千里ニュータウン（以下千里ニュータウン）の二地域の比較調査を行った。二地域の

四十五から八十歳の中老年女性約千人に郵送アンケート調査を実施し、近隣、親戚、仕事仲間、友人とのそれぞれの付き合いの程度（つきあう頻度、つきあいの深さ）を尋ねた。また、家具の移動といった小さなサポートから病気や災害時のサポート、意気消沈時のサポートなどを誰に求めるかという項目も設け、ソーシャル・サポートの面からも分析を試みた。



豊中市の街並み

調査結果

先行研究から導いた仮設「都市ほど近隣関係は希薄である。」「人口が集中していない地域ほど親戚関係が多く、人口が集中する地域ほど友人関係が豊富になる。」を概ね支持する結果となった。

一方で、先行研究とは異なる分析結果もあつた。先行研究から、農山村や過疎地域での暮らしには別居子の存在が非常に重要であることから、「別居子が物理的に近くに住んでいるほど、別居子から多くのサポートを入手している。」という仮説を立てた。都市度の高い地域は

ど別居子の居住地は分散するという点は、先行研究と同じ結果であったが、千里ニュータウンの別居子の帰省頻度は足助町と大差なく、千里ニュータウンでさえも、親の暮らしは情緒的にも手段的にも別居子に支えられていることがわかった。

現代におけるつながり

この十年で、近所づきあいや人々のつながりのかたちは随分と変化したように感じる。都心部では地域コミュニティに関心の薄い住民や、「おひとり様」が増加。高齢化も進行し、コミュニティ存続の危殆に瀕している地域も多い。その一方で、人とのつながりを求め地方に移住する者やコミュニティづくりに尽力する者も増えてきており、人によりコミュニティに対する温度感はさまざまだ。

これからの時代には、かつての非選択的なネットワークではなく、それぞれの温度感の違いに合った、出入り自由で多様なネットワークの在り方が求められているのではないかと感じる。



足助町の街並み

※本原稿は筆者の大学卒論調査を再編集したものである。